

障害者スポーツの現状と取り組み

ー誰もが楽しめるスポーツ環境の実現のためにー

長野 裕人

本研究は、障害者スポーツの現状と課題を明らかにし、その普及に向けた具体的な方策を提案することを目的とする。障害者スポーツは、健康維持やリハビリテーションの枠を超え、社会参加や自己実現を支える重要な手段である。しかし、日本における認知度や参加率は依然として低く、物理的・社会的な障壁が普及を妨げている。

第1章では、スポーツの意義と生涯スポーツの概念を整理し、日本における障害者の現状を厚生労働省のデータを基に分析した。さらに、障害者スポーツの定義や特性を考察し、障害者スポーツというのは、「何らかの障害がある人も楽しめるスポーツ」であることを示した。

第2章では、障害者スポーツの歴史的背景を振り返り、現在の実施状況や主要競技の特徴を示した。第二次世界大戦後、リハビリテーションを起点に発展した障害者スポーツは、パラリンピックなどの国際大会を通じて注目を集めてきた。しかし、現在も施設不足やバリアフリー化の遅れ、社会的理解の欠如などが障害者のスポーツ参加を阻む要因となっていることが分かった。さらに、競技性が高く、視覚的な魅力やスピード感のある「車いすバスケットボール」や「車いすテニス」はスポーツファンや初心者にも理解しやすく、認知度が高いことが分かったが、実際に行われている運動は、「ウォーキング」や「散歩」のような日常生活の延長線上にある運動が中心であることが明らかになった。

第3章では、20歳から25歳の男女49人を対象としたアンケート調査の結果を整理した。調査によると、障害者スポーツに興味を持つ人は約4割程度にとどまり、テレビやSNSが興味を引く主な方法である一方で、実際の体験機会が不足していることが普及を妨げている要因であると分かった。また、興味を持たない理由として、情報不足や身近に接する機会の少なさが挙げられた。

第4章では、アンケート結果をさらに分析し、スポーツ経験の有無や認知度が障害者スポーツへの関心に与える影響を検討した。スポーツ経験の有無による関心の差は小さく、認知度の向上と、魅力を効果的に伝える必要があると考察した。

第5章では、調査と分析の結果を基に、障害者スポーツ普及の課題と、普及促進に向けた施策を示した。普及促進のためには、「情報発信の強化」、「体験型イベントの推進」、「教育現場での導入」、「環境整備の促進」、「偏見を払拭する活動」が重要だと結論付けた。

しかし、視覚的な魅力が高い車いすを使用する種目などはSNSや動画配信との親和性が高い一方で、ブラインドサッカーのような視覚的表現が難しい競技には別のアプローチが必要であり、競技ごとに特性を考慮した情報発信を行う必要があると分かった。